私が魔王（サタン）に転生しちゃった！

白狐のイナリュウ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

成績優秀の女子高生主人公が、ある日を境に命を落とすのだが。魔王にならないかと先代魔王に勇者になる代わりに魔王となる契約を交わす。名前はサタンと名付けられ、数々の困難に立ち向かうお話。

※これはスマホアプリであったフルボッコヒーローズＸの二次創作です。うｐ主は馬鹿で誤字脱字や漢字の使い間違い、台本形式で進んでいくのでいまいち話の繋がりがわからないかもしれませんが、温かい目で見てください。

目次

Act，1　サタンになっちゃった！　1
Act，2　私、立派な獣人になりたい！　19

Ａｃｔ，１　サタンになっちゃった！

彼女の名前は、心之（こころの）焔華（ほのか）。本人には変わった苗字で、あまり好きな名前ではなかったのだが我慢して生きている。しかしある日を境に彼女は命を落とすことになった。

彼女はまだ高校２年生で部活は陸上部をしながら学級委員長をしている。遅刻は年に１回程度で運動や歴史などの成績は優秀なのだが少し物静かで友人は数少ない、だがいじめを受けずに友人と最高の暮らしができているのには理由があった。

彼女の性格は負けず嫌いで少し頑固な性格、外見はお嬢様な感じなのだが肉食系女子。周りからは信頼性があり格闘系にもあまり手が出せないのだ。部活では部長を任されていた。

焔華「ま、マズっ遅刻だああ！」

母「ほのか～、朝ごはんはぁ？」

焔華「いや食べてる時間ないって…今から行くとギリギリＨＲに間に合うか、いってきまーす！。」

母「ちょ、焦らないでゆっくり登校しなさいよぉ!?」

という焔華の母の忠告を聞かずに全速力で学校に向かっていた焔華、家から学校まで

は、およそ数十メートルあり信号を渡らなければならない。家の角を曲がり校門の前にある信号に近づいてきた、信号は青になっており急いで渡ろうとした。

しかし、焔華にある衝撃が走った。固く強く体がその衝撃に耐えられず腰から首まで左に吹っ飛んだ。その衝撃の正体は、大型トラックだった。意識ごと持って行かれそうな中焔華は死を悟り、考えるのをやめた。焔華の胴体が道路に叩きつけられる。それと同時に頭を打ち、周りが真っ暗になった。騒音と心拍数の音が微かに聞こえ、誰かが焔華の名を必死に呼びかけた。だが最後に聞こえたのは心肺停止を指す音と皆が泣いている声だけだった。

１時間後、焔華は目を覚まし起き上がった。しかし妙だった、普通なら起き上がれるはずがないのにも関わらず無造作に体を動かすことができたのだ、腕も骨折どころか手を付いて立つことができたのだ。少し貧血気味なのか頭を抱えた。

周りは洋風のカーペットやカーテンが多く見られた。しかし少し薄気味悪い部屋だった。

目の前にあったドアを開けてみるとそこは廊下になっており飾ってあるのか、鋼の甲冑が並ばれたいた。

奥には大きなドアが存在しており、焔華は不思議に思った。ここはどこで一体自分はどうなってしまったのか。焔華は事故の時の記憶が思い出せずにいた、いや記憶にな

い。

大きなドアを開けると、そこには王座があり誰もいなかった。だが、廊下にあった甲冑が並べられていた。だが廊下にあった甲冑より金色に輝いており、近未来風の甲冑だった。

すると、ある声が聞こえるようになった。

???「よく来た、魔物よいや魔王の後継者というべきか…まぁ私の目の前に来なさい。」

と呼ばれると焔華は見知らぬ者の前まで向かい、何故か体が勝手に動き膝末いたのだ。そして黒い霧が現れ、顔らしきものが出てきた。しかし顔はよくわからない。

魔王「よく来た、私の後継者よ…そして勇者よ。」

焔華「あなたは、ここの王様…いや見た目からして魔王かな?」

魔王「そうだ、私はここの魔王でこの国の王である。」

焔華「それじゃ魔王様、私は一体どうなってしまったのですか…私は死んでしまったのですか?」

魔王「ここでは王と呼べ…!」

焔華「え、あっ…はい…失礼しました(震)。」

魔王「そう、貴様は死んだ…この表によると…貴様は信号無視をした大型トラックが貴様を轢き、地面に叩きつけられ即死だ。」

魔王「当然、トラック運転手は居眠り運転で逮捕されたがそいつは轢き殺したことを認めていない。」
焔華「そんな…それじゃお母さんに会えないの…。」
魔王「寿命とは結果短い者もいれば長いものもいる、仕方のないことだ。」
焔華「ってことはここは天国とかなんですか…いや魔王がいるから地獄か…。」
魔王「いやここは地獄でも天国でもない、貴様はまだ逝くべきものではないと神が判断したのだろう…しかし燃えてしまった肉体は戻らない、だが貴様はこの冥界ギルド世界で新たな人生…新たな生活が贈れるのだ。」
魔王「私が貴様をこの火山の国に呼び寄せたのはほかでもない、本来なら神に会うことになり種族を選ばされる。」
魔王「当然、魔王や悪魔なども種族は選べない。」
焔華「獣人も?」
魔王「ああ、ただ耳と尻尾が生やすことはできるそういう種族は存在するからな、もちろん手も翼にすることが可能だ。」
焔華「エルフも?」
魔王「…可能だが、まさか魔王になりたくないのか…（汗）?」
焔華「い、いや、下界って言えばいいのかな…下界にいたときやってたゲームでは普

通勇者か村人とかが基本だと思って。」

魔王（こやつに任せて大丈夫なのだろうか…？）

と話を進め、この世界のことについてと持ち物のことについてのことなど色々魔王に教えてもらいようやく本題入った。

スマートフォンと言った機種などは存在するのだが、下界のものといったものは見ることはできない。またまだ下界の極わずかといった部分しか発展しておらず、未だに馬車や蒸気機関車が動いている。車もまだ蒸気で動いている。しかし、ほとんどの者は、魔法や科学などで病気や怪我といったものを直したり開発していることが多い。また奴隷を使った職も多く風俗と言いた店も危険なことをしているところが多い。（下界にある物が多くギルドに存在しているからである。）

魔王「それでは、本題に入ろう。」

魔王「今この世界には様々な危機に直面している、新たに最強と呼ばれる魔物が現れたのだ…また奴隷法も頻繁になっている。」

魔王「もう私ではうまく国を動かすのは愚か、権利すらなくなりかけている…また不老不死といった力も落ちつつある。」

魔王「本来私は不死身でな、死ぬことはできないのだが…何者かに不死身の力を解除する薬を飲まされてしまってこのざまだ。」

魔王「だから、貴様に魔王の座を渡そうと思う、その為に貴様をここに呼び寄せたのだ…経歴や成績も優秀だと神々からも褒められ私も君のことを高く評価している。」
焔華「それは…光栄です。」
魔王「魔王になれば、魔法や剣術など技を簡単に…いや魔王になった時点で得とくする。」
魔王「そしてある程度の法も動かすことだできるのだ。」
焔華「す、すごい…じゃぁ、この国も全て私のもの？」
魔王「全てとは行かないが3分の1は貴様のものだ。」
魔王「魔王になって勇者になってくれぬか…？」
焔華「魔王か…って勇者!?」
魔王「ど、どうしたのだ？」
焔華「普通は魔王になったら私がラスボスにならない？」
魔王「細かいことは気にするな小娘が（怒）!!」
魔王「別に魔王が勇者でもいいの、魔王だって国のヒーローになりたいじゃん…いいじゃん魔王が勇者になっても、もう悪党になるの嫌なんだよおおおおおおおおおお！」
焔華「は、はぁ…。」

焔華（本当にこの人魔王なのかな…？）

焔華「わかりました…この国…いやギルド世界が救って、ヒーローになれるのなら…魔王にだってなります！」

魔王「よく言った焔華よ、貴様に魔王の座を渡そう！」

魔王「そして前の名前を捨て、これからはサタンという名になるよく覚えておけ。」

焔華「サンタ？」

魔王「サタン！」

魔王「さぁ行くぞサタン、これからはサタンとして生きていくのだ…少し苦しいと思うが我慢せえ。」

魔王「魔王の血、魔王の力を分け給え…そして苦難を乗り越え、何事も得る魔物に獣神せよ…また全てを受け取り給え。」

魔王がそう唱えると焔華の周りに魔法陣ができ、呪文を唱え終わると焔華に無数の苦しみと快楽、そして痛みと強欲などが押し寄せてきた。また電子回路みたなものも体に浮き出てきた。体が少しずつ黒く、できた電子回路は明るい少し黄緑色が混じった水色に変色、すると第一の爆発が起き体がスライムみたいに溶け始めた。全部溶けると同時に体が出現、いくつもの魔物にかわり最後の爆発と同時に焔華はもはや”サタン”のからだになっていた。肌は褐色になっており色黒に変化していた。服装も魔王にふさわ

しい姿になり。焔華は耳を触ると先が茶色に変色しておりエルフの形になっていることに気づく。また頭にある触覚を触ってみると角が生えており黒く赤く輝いている。手や足は獣そのものになり、尻尾は悪魔の尻尾が生えており、髪の色は水色がかった白髪だデコ方を触ってみるとそこにも角が生えており魔王そのものになれた気分になった。鏡を見てみると自分の顔であるがまるで別人のようにみえる、まるで顔が似ている人と思えてしまうほどに。

頬には丸長い深い傷がついている、だが完治はしているが痕になって消えない。触ってみるくぼみがある。そして自分の名を思い出そうとするがなぜか魔王に付けられた名前を思い出してしまう。だがそれが自分の名前だと理解し焔華という名前は知り合いが来たときにいうように決めた。

魔王「これで貴様も魔王一族の仲間だ。」

サタン「これが私なのか…って口調も変わっておるではないか!?」

魔王「まぁ、魔王になるならば口調も変わってしまうことを覚悟しなければならないからな。」

サタン「そこは先に言うべきだろ、先に！」

魔王「まぁまぁ、さぁこの剣を持て生きているし喋ることができる大事に扱え。」

ケン「よぉ俺はケンだよろしくな！」

サタン（ケンに剣か…寒いな…）
魔王「それと、私は魔王にさせるつもりだったのだが魔法の順序を間違えてしまってな、獣神化してしまったらしい…。」
サタン「もうつっ込まんからな…。」
魔王「獣神魔王になった貴様だ、潜入などにいろんなやつに化けられるだろう好きに化けてよいぞ。」
サタン「なんだ、限りはないのか。」
魔王「それでは、勇者サタンよ…行ってこい！」
サタン「はっ、全ては魔王様の、いえ闇魔様の仰せのままに。」
魔王「いや魔王でいいだろ…。」
サタン「はい、闇魔様。」
魔王「お前わざとだろ、絶対わざと言ってんだろ…。」
サタン「どうされたのですか、闇魔様。」
魔王「はよ行かんかこの馬鹿者！」
というと城の門の外に瞬間移動させられ行き先もわからないまま、魔王という種族を逆手に取り勇者として生活することとなった。城を下り、下った先にあった村に向かった。村は祭りだったのかかなり賑わっており人ごみに紛れ酒場へと向かった。

サタン（思ったより人や魔物が多い、やはり普通に生活している者もいるんだな。）
店員「いらっしゃいませ、あちらの席へどうぞ。」
とハーピィ族の酒場の店員にカウンター席に案内され、ウォッカを頼んだ。地図を開くと魔法でペンをだし近くの村をマークした。しばらくは徒歩で行き遠いところは馬車や汽車を使い行くことを考えていた。
バーテン「あんた、旅人かい?」
サタン「最近旅を始めたものだ、ちょっとした調査を頼まれてな…あまり言えることじゃないが…。」
サタン（そういえば、”魔王の手下のサタン”だって言ったら大きな混乱が及ぶ…あまり名を出すべきではないな。）
バーテン「ふぅん、ここは旅人や勇者がよく来る店でね…ここはクエストも受けられるわけだ、レベルに困ったときはクエストを受けるといいよ。」
サタン「ご新設にどうも、時間があるときに受けてみるよ。」
???「なぁ、いいだろぉ～触っても～。」
店員「や、やめてください…!」
???「なんだよ、断ることねぇんだって。」
バーテン「ここはお触り禁止だ、触りてぇんだったら風俗店でも行ってな。」

???「んだよ、長旅で疲れてんだちょっとくらいいいだろぉ？」
サタン「いつもこうなのか？」
バーテン「たまに居んだよ、こういう奴…あんまり店の中で面倒事起こされると困るんだよなぁ…。」
サタン「ほっとけばそのうち行くさ、私もこういうめんどくさい連中に関わったことがある…こういうのは無視だ。」
バーテン「といってもねぇ、追い出さないと繁盛しないからさ…やっぱり言ってくるよ。」
サタン「気をつけろよ、酔って手出すかもしれない。」
とサタンは忠告した。バーテンは男にやめないと、出禁にすると言うと男の行為はエスカレートしハーピィに手を出し引張抱いた、その時サタンに怒りがこみ上げた。その瞬間その男の前まで向かった。男が暴れ、バーテンを押し倒しハーピィにまた手を出そうとした瞬間、サタンはそれを止めた。
サタン「貴様…女のハーピィ族に手、出したらダメだろう…男ならわかるはずだが？」
???「なんだテメェ！」
サタン「私を怒らせたこと後悔させてやろう。」
???「なんだよ部外者は引っ込んでろ！」

サタン「私は部外者ではないんでね、店の者も困っている…その手を退かせば私はこの場から退こう。」
??????「よく見ると、あんた悪魔族のやつだな…何善人ぶってやがんだ!」
「決めた、こいつも連れてヤることに決めたぜ!」
サタン「ほう、よかろう…それじゃ条件付きだ、私に格闘し勝ったら貴様についていこう…それで良いか?」
???「いいぜぇ、その勝負乗ったぁ!」
サタン「それじゃ貴様の名を教えてくれ。」
ビル「俺は、ビルだ…ま、これから奴隷(おもちゃ)になる奴には名乗ることでもねぇけどな。」
サタン「それじゃビル、私は1秒でカタを付けると宣言しよう。」
ビル「ふ、俺のレベルは２８だそう簡単にやられ―」
と言っている途中でサタンが反撃し、腹に一発入れた。するとビルは腹を押さえその場に倒れ込んだ。サタンは剣とカバンを持ちカウンターにつり銭を置いた。
サタン「これは謝礼とウォッカ代だ受け取ってくれ…ああ、あとそれとビル。」
サタン「貴様にだけ言うが、確かに私は悪魔族の魔物だが…私は魔王様に仕える者で勇者をしている、名はサタンと言う…よく覚えておくのだな。」
というとサタンは酒場を後にした。酒場にいたものは驚きを隠せずにいた、もちろん

ビルも同様だ。
ビル「え、マジで言ってんの…あいつ、あの有名な魔王の使いなのか…!?」
魔王に使えているサタンの名は世界中に知れ渡った。住民は最初恐れたが、心優しき神の使い魔でもあり魔王の手下と言われ崇められた。次の村に行く途中では、倒れそうな勇者の怪我を治療し食料を分け与えたということも噂になった。
そして、2日かけ着いた村が森林の村だ。
サタン「2日も掛かってしまった…まぁいいこれも運動と思えば楽なものだ。」
サタン「それにしても、私のことが噂になっている…正直あの時捨て台詞を言わなければ良かったか?」
と独り言を言うと宿舎が見え、サタンはしばらく森林の村に泊まることにした。荷物と鍵を預かると、机に向かい地図を確認し次の村の行き先を確認していた。確認し終えるときにはもう既に昼時、酒場を探し食事をしようと考えた。
???「お待たせしました…ごゆっくりどうぞ…。」
サタン(アザ?)
サタン「そこの者、少し話をしようではないか今は客もあまりいないみたいだし。」
???「すいません、今は忙しいので…。」
サタン「大丈夫だ、時間はとらない。」

と言われると獣人はサタンがいる席についた、サタンが食べようとしていた自分の皿を小汚い獣人に差し出し遠慮せず食べろといい食べ終わるまで、サタンは待ち続けた。食べ終わるとサタンは口を開きこう言い出した。

サタン「長い間何も食べていなかったのだろう、食べないと体に良くない…かなり疲れも見えるぞ?」

サタン「大きな声では言えぬが、私は魔王様に仕える者だ…サタンと呼んでくれ。」

マルコ「は、はぁ…初めまして、私はマルコシアスといいます…皆はマルコと呼んでます。」

サタン「そうか、マルコ…なぜそなたが元気がない理由を当ててやろうか?」

マルコ「もうよろしいでしょうか、仕事に戻らないとご主人に怒られてしまいます。」

サタン「大丈夫だ、マルコのことをしばらくは思い出せないように魔法を掛けといた…遠慮せず座りたまえ。」

サタン「主人の虐待や恐喝されて、寝れない日々を強いられているのだろう…その傷とアザが証拠さ。」

マルコ「…。」

サタン「無理に言う必要はない、話したくなったらいつでも言ってくれ…しばらくはここに居る。」

といいサタンが席を立とうとした瞬間、マルコは待ってと答えサタンは再び席に座りマルコの話を聞くことにした。

マルコ「…私は闇狼の一族でいつも、護身術を叩き込まれており裕福な暮らしでした…でもあるとき村が襲撃されて、戦った獣人は殺され、逃げたり生き残った者達は奴隷となって辛い日々を過ごすことに…私もその生き残りで、最終的にこの酒場で奴隷として扱われることとなり…殴られたり、叩かれたり…脅されたりされる日々で、ごはんも週に1回程度しか食べれなくて…苦しんでいました。」

サタン「その時食料はどうしていたんだ?」

マルコ「たまたま閉じ込められている牢獄には水が運良く流れていて、それで飢えを耐え抜いてきました。」

サタン「それは辛かろう…私は、奴隷法を許せんよ…よし助けてやろう、元々私は魔王様に頼まれ奴隷されてしまっているものを開放する為に旅を始めたのだ。」

マルコ「そんな、大丈夫です…もう慣れましたし、助けなんて必要ありません…それでは失礼します。」

といいマルコは、席を立ち仕事を始めた。と同時にサタンの魔法が解け、酒場の主人がマルコに対し腹を立て叱り始めた。

サタンは宿で飯を食べることにし、その酒場を後にした。

一方マルコというと、夜になると酒場の主人が牢屋にいれ今回の売り上げのことを言い出した。マルコの売上の少なさに腹を立てた主人は、怒りムチを取り出しマルコを引っぱ叩いた。マルコは嫌だ、痛いと言っているのを見た主人は牢屋の外に引っ張り出し店の裏側に連れ込んだ。そしてマルコに油をぶっかけた。

マルコ「い、イヤ!」

主人「全く悪い子だ…売上の悪い奴は処分に限る、燃えて消え去れ…お前みたいな姿をした奴隷は”いくらでも変えが居んだよ”!」

???「”いくらでも変えは居る”っか、だがマルコは一人しかいない…それはどういう責任を取るんだ、ご主人?」

主人「ん、ああ、すいませんね…お見苦しいところお見せしてしまって、今日はもう遅いですしまた来てくださいよお客人。」

マルコ「さ、サタンさん!?」

主人「お前はうるせぇんだよ!」

といい火をつけた棒を振り下ろそうとした瞬間、ただの変哲のない木の棒にすり替わっていた。それに酒場の主人が気づくと後ろを振り返った。その時サタンは主人が持っていた火が付いた木の棒を持っており、炎を口の中にいれた。

主人「な、なにやってんだ!?」

サタン「ふぅ、こんなの熱くもないし痛くもない。」
サタン「マルコを売上の商売道具に使うな、彼女も列記とした生き物、人であり動物であるだろう？」
サタン「さぁ行こう…。」
マルコ「は、はい！」
主人「ふざけんな、俺の大事な商売道具を返しやがれ！」
といい襲いかかったが二人で店の主人を蹴り飛ばした。するとマルコはこういった。
マルコ「貴方はもう私の”ご主人”じゃない、サタンさん…いやサタン様が私の唯一のご主人なんだ、一切手出しはさせない！」
サタン「そうだ、こやつはもうお前の主人でもなんでもない…ただの”ゲス野郎”だ。」
サタン「さらばだ外道、こやつは私が買い取った。」
といいその場を去った。次の日、サタンはマルコに合う服と装備や武器を探した。
サタン「お、これなんか良いではないか？」
マルコ「西欧風のゴスロリ服…ご主人、案外悪趣味なんですね。」
サタン「な、何を言うかこれはオタク達の流行りなのだぞ!?」
マルコ（この人、どんな所に住んでたんだろ…。）

マルコ（カリスマ溢れる魔王で格好良い人だと思ったけど、案外キャラブレ激しい人なんだなぁ…。）

マルコ「でも、それがこの人の優しさなんだなぁ…。」

サタン「何か、言ったか?」

マルコ「いえ、何も…あっ、これとかいいんじゃないですか、古代エジプトで流行った服ですよ?」

サタン「おいおい、これは男物の服だぞ?」

マルコ「あ～…。」

と二人は服選びを楽しんでいた、パートナーが増え楽しく旅を続けるサタンだった。

Ａｃｔ，２　私、立派な獣人になりたい！

旅を始めて３日、魔王の力を授かり勇者となったサタンと奴隷として囚われ元戦士の魔神狼マルコシアスと共に旅を続けていた。しかし、目的地としていた村「獣の村」行く途中道に迷ってしまう二人だった。

マルコ「あの～…ご主人？」

サタン「…なんだマルコ。」

マルコ「ホントにこの道であってるんですかぁ？」

サタン「そのはずなのだが…木ばかりで、目印となる看板が見当たらんのだよ…。」

サタン「そんなことより、そのハンマー重たくないのか？」

マルコ「ええ、力と魔法に多少自信はありますから。」

サタン「私は腰に身につけている剣が異常に重たく感じられるよ…。」

ケン「俺はそんなに重たくないぞ!!」

サタン「それじゃぁ、お前の重量何キロなんだ？」

ケン「１０５８キロだゾ。」

サタン「１トンもあるじゃないか！」

マルコ「その剣…話すんですね知りませんでした。」
ケン「目玉がついた恐ろしい剣だけど俺様は喋ることだって出来るんだ！」
サタン「こやつはケンだ、時々話し相手がいない時は役に立ってくれるのだがな…口を開くと五月蝿いのだよ。」
と話ながら、着く気配もないなか道なりに進んで行くしかなかった。しかし、いつまで歩いても着かないことにサタンは腹を立て木のそばに荷物を置いた。マルコに荷物番をさせ、サタンは翼を広げ一度空に飛び立ち周りの様子を見ることにした。
サタン「うわぁ…あたり一面森で村らしきところなんてなんにも見えん…。」
マルコ「どうですか～、ごしゅじ～ん！」
サタン「ダメだなんにも見えぬ！」
マルコ「う～ん、このまま見つからなかったら…森の中で野宿することになるのかな…。」
とサタンが降りてくるのを待っていると香ばしい美味そうな料理の香りがマルコの鼻に入りマルコのテンションを上がらさせた。
マルコ「ご主人、ニオイませんか?!」
サタン「ほう…シチューだな、美味そうなニオイだきっと村はそこにあるのだろう。」
マルコ「行きましょう、ご主人！」

サタン「待つのだマルコ、一人で行動することは死を意味する…ここは一緒に行くのだ。」
マルコ「わかりました、さぁ行きましょうよ!」
サタン「ふっ、現金なやつだ。」
匂いに釣られスサスサ歩いていくマルコ、サタンは笑みを浮かべ何を思ったのかマルコを持ち上げ空に飛んだ。
そしてようやく村らしきところに着いたのだが人の気配が少なく外に出ているのは狼の獣人の住民が数名いる程度だった。
さらに、サタン達がいるところは村ではなく町ということがわかった。
住民「あらいらっしゃい、”獣の町ビーストタウン”にようこそ。」
サタン「ああ、お前さんに聞きたいことがある。」
住民「いいけど、よく見ると悪魔族の人みただねぇ?
マルコ「ちょっとした調査のために旅をしてお伺いしたいことが…。」
サタン「この町の住民は一体どうしたのだ、それにいつから町に改名したのだ?」
住民「ずいぶんと前の話よ、どんどん村が発展していったって町に改名したらしいのよ。」
サタン「だからなのか、地図によると獣の村となっていたのだ。」

住民「ああ、それは地図の方まで改名する手続きが回らなかったのよ…勘違いするのも無理ないわ。」
サタン「なるほど、だからなのか。」
マルコ（え、納得しちゃうの!?）
マルコ（普通は地図の書き直しの方まで手回すと思うけど…。）
住民「ああ…あと、ここは夜にならないと狼達は外にでないの。」
サタン「それなのに、外に出ている者がいるが？」
住民「ここに来た旅人を迎えないとね、住民一人いないのは流石に変だと思うでしょう？」
住民「それに人間と同じ時間に起きて行動するしたいでしょう？」
サタン「ここに居るもの全員がそうなのか？」
住民「ええ、変かしら？」
サタン「いや、こやつも同じ生活リズムで生活してきたのだ変とは思わんよ。」
マルコ「えと、宿屋ってどこにあります？」
住民「まっすぐ進んでいくと宿屋なんてそこら中にあるよ。」
サタン「わかった、ありがとう獣人よ。」
といいサタンとマルコは言われた通りまっすぐ進み、階段を下りて行った。

住民「あの、悪魔族の人…どっかで見たことあるような…。」
宿屋がある町に行くと住民が言った通りそこら中に宿屋が存在していた。しかし、そこには風俗にまぎれた宿屋もあり少し警戒していた。だが、どこも安いと書かれた看板の宿屋ばかりでとにかく二人が目の止まった宿屋に泊まることにした。
そしてマルコが目に止まった宿屋にすることにした、だが。
マルコ「え～、１泊５０００ゴールド取るのぉ!?」
宿屋「んだよ、文句あんのか？」
マルコ「あるある、めっちゃあるよ！」
マルコ「一泊ツインベットだけで、５０００ゴールドも取るってぼったくりじゃない！」
宿屋「知るか、うちは生活かかってんだ他の村は１００ゴールドか１０ゴールドで安い価格で泊まれるかもしれないけどなぁ――！」
サタン「まぁまぁ、マルコがここが泊まりたいと言ったんだあまり文句は言えぬ。」
サタン「シングル（ベット）で1泊いくらだ？」
宿屋「場所によるが、２３００ゴールドだよ。」
サタン「仕方ない４６００ゴールド払うよ。」
マルコ「え、いいんですかこんなぼったくり宿に泊まって!?」

サタン「金は私持ちだし、マルコがここがいいと言ったのだ遠慮しなくていいぞ。」
とサタンは紐に結ばれた金が入った袋を開けると宿屋の主人がこう言い出した。
宿屋「その袋に書いてある紋章…魔王にならないと取れないよな？」
サタン「それが？」
宿屋「あんた、どっかで見たことある顔だな…？」
サタン「私はお前と会うのは初めてなはずだが？」
というと宿屋の主人がちょっと待ってくれと言うと、カウンターにあったドアに向かい中に入ってしまった。1分待つと主人が誰かの似顔絵みたいなポスターを持って出てきた。すると、その主人はそのポスターをサタンの顔の横に近づけサタンとサタンに似ている似顔絵のポスターと照らし合わせた来た。
宿屋「あ、あああああ！」
宿屋「あんた、まさか噂の魔王に仕えてるっていう勇者かい!?」
宿屋「た、確か…さ…さ…。」
サタン「〝サタン〟だ、それがどうしたというのだ？」
宿屋「そ、そう、〝サタン〟だ！」
宿屋「も、申し訳ありません…あのサタン様と知らずに大きな態度に出てしまって、お詫びにここの宿1泊無料でお泊めさしあげます！。」

マルコ「え!?」
サタン「いや、しかし…。」
宿屋「いえ、お題は結構ですので!」
サタン「特別扱いせんで良いのだが…ちゃんと宿代は払う!」
宿屋「こちらが鍵となります、それではごゆっくりどうぞ!」
サタン「…。」
サタン（申し訳ないな…そこまでしなくても良いのに、そんなに私のこと有名になっているのか…?）
そして、ツインの部屋に泊まることができたサタン達。まだ朝なため外に出ている狼達は少ないと踏みしばらくは部屋のなかにいることにした。だがしかし、宿屋の主人に今日は”姫様”と”王子様”がこの街を回る年に一度の盛大の祭りがあるとのことを聞き夜まで待ってみることにした。
数時間後、サタンが持っていた懐中時計を開けて見てみると6時になっていた。サタンは外に出て街中を探索することにした。
サタン「マルコ、そろそろ外に出るぞ?」
マルコ「ふぇ…もう行くんですか?」
サタン「外をよく見てみろ、もう夜だ。」

マルコ「え、やばい…もっかい寝よう…。」
サタン「寝るな馬鹿者！」
マルコ「え、なんでですか？」
サタン「なんでじゃない、いつもみたいに早寝早起きというのはもうないんだぞ？」
マルコ「あ…そうか、もう嫌な思いしてた頃とは違うんだった…。」
サタン「さぁ、行くぞ。」
マルコ「あ、ちょ…待ってくださいよぉ！」
サタンはマルコを連れ、外に出た。外に出てみると、今までいなかった狼の住民が外に出ておりあたり一面獣人で溢れていた。そしてサタンとマルコは音の鳴る方へと足を運んだ。そこに行ってみると噴水があり、市場や防具屋などで握わていた。
さらに、祭りのせいなのか皆おめかしをし外に外に歩いていた。
サタン「流石にこの服ではここを指揮している者に会えぬな。」
マルコ「どうします？」
サタン「あの店にドレスなどがあるな、そこで買おう。」
マルコ「ドレス、ご主人も来て町を歩いてみましょうよ！」
サタン「私は着ぬぞ。」
マルコ「え～、そんなクールにならないでたまには女の子らしく行きましょうよ！」

サタン「絶対着ぬからな！」

そして2時間後、サタンはマルコにドレスを着せられたり自分の合う服で戸惑ったりし最終的にサタンはゴスロリ風のドレスに、マルコはアラビアン風のドレスに着替えた。しかし、サタンは今まで身軽な服装で旅を続けていたため少し窮屈そうだった。

マルコ「結局ドレス着てるじゃないですか…しかもゴスロリですし…。」

サタン「私には色っぽい服は似合わんのだよ！」

マルコ「何がですか、さっき着せた服とっても似合ってましたし！」

サタン「何を言うか、あれマジで恥ずかしかったのだぞ!?」

マルコ「え～、ドレスだけで恥じらうことないじゃないですか…逆に私なら下心丸見えな、破廉恥そうな服絶対来たくないですよ。」

サタン「私の着てる服は下心丸見えな服だと言いたいのか！」

マルコ「そうですよ！」

マルコ「なんで色物のドレス着ないんですか、最近の流行りなんですよぉ!?」

サタン「流行りなど興味はない！」

マルコ「そう言ってると、時代に置いてかれますよ?」

サタン「なら時代とやらを私の者に書き換えてやろうか?」

マルコ「え…。」

サタン「いや、冗談だマジになるなマルコよ…。」
マルコ（冗談に聞こえないよご主人！）
と話していると、町の住民全員が地面に膝未きゲリ様・フレキ様と言っている。不思議に思った二人は様子を伺っていると、目の前に椅子に座った２人の狼がそこにたどうやらその椅子は下に敷いているいたと一体化しており手下が土台と繋がっている棒を持ち担いで歩いている。どうやら姫達を運んでいるようだ。
それに気づいたサタンは、あまり魔王以外には膝未きたくはなかったが膝未くことした。マルコは訳も分からず周りをキョロキョロしていたがサタンが私と同じ行動をしろというと理解したのか、マルコも膝未くことにした。
???「止めて頂戴。」
姫達は見慣れない者がいることに気づき、二人がいるところで止めた。当然王子も姫と一緒に地面に降りた。
???「見慣れない子ね、どなた？」
サタン「初めまして、姫…あえて光栄です…私は魔王様に仕える者でサタンと申します…となりにいるのは連れの狼、マルコシアスです。」
手下「姫様、王子様…この方はあの有名な勇者のサタン様です。」
フレキ「へぇ～、私こそ会えて光栄です…私、フレキと申します。」

ゲリ「僕、ゲリって言うんだ…よろしくサタン様。」
フレキ「今日は最高の”お祭り”よ、それにあの”有名な勇者”が来ているのだから盛大に盛り上がらないとね、みなさん!?」
とフレキが言うと町は大盛り上がり、それほどまでに姫と王子の力は偉大だということがわかる。するとサタンは早速フレキに話を伺いたいと聞き魔王に聞いた不死身の薬と奴隷法についてきちんと聞こうとした。
フレキ「話ね…わかった、それは城の中で聞くことにしましょう。」
フレキ「さぁ、立って案内するわ。」
といいサタンとマルコがその場から立ち上がるとゲリは何を思ったのか、興奮してしまった。
サタンは何か視線を感じると下を向いてみるとゲリが顔を真っ赤にし恥ずかしそうにサタンの胸を見ていた。どうやらサタンの胸に興味を持ったらしい。サタンは不思議そうに見ていたが胸のことだと気づくと、気づかぬふりをしフレキの指示を待っていた。それも表情一つ変えず少しニコッとした程度で。マルコはそれに気づくと流石に肝が据わってるなと思い、サタンを睨みつけた。
フレキ「どうしたのゲリ、具合でも悪くなった?」
サタン「思春期の子供はそういうところがあるのだろう、ゲリよここは抑えるのだ

…。」

ゲリ「〜〜〜ッ／／／」

フレキ「…早く乗って…。」

マルコ（やっぱご主人って処女なのかな…？）

ゲリが顔を真っ赤にし椅子に座ると、城まで行こうとしたがフレキがいつもの服というのがとても気になったためトイレで着替えさせられた。着替え終えるとすぐに城まで、向かった。道中ゲリはサタンの顔と胸をよく見てくるためフレキは毎度頭を叩いた。時より二人の喧嘩がみられ二人は苦笑いをした。城に着くと、すぐに”会議室”という大食堂に連れてこられた。サタンが大食堂ではないのかというと、ここは二人で出た案とか大総統が話し合いの時よく使う部屋だと言った。

フレキ「で、話ってなに…まさかサタンさん、この国が欲しいとか言わないわよね？」

サタン「まさか、私もそこまで強欲ではない、国一つ欲しいとは思わんよ。」

フレキ「じゃぁ、なんなのよ？」

サタン「まず質問のだが、不死身の薬のことについて聞きたい。」

フレキ「不死身の薬？」

サタン「ああ、魔王様が困っているのだ…何者かが魔王様に不死身を解除す薬…この世界でワクチンという表記を使うかは不明だが、不死身になれる薬のワクチン剤を飲ま

されてしまったのだよ。」
サタン「だから、その不老不死になれる薬を探している。」
フレキ「ワクチンね、それは気の毒だけれど…私たちもそれを探しているの。」
フレキ「長く生きたいという狼達は少なくないのよ…だからどこにあるかは私達は知らないわ。」
サタン「そうか…別に特に期待はしていなかった、あるとは確信できるものではないからな。」
ゲリ「え、えーと…噂なんだけど、遠い村の向こうに火山があってその奥に不死身の泉があるっていうのは来たことがあるよ…。」
ゲリ「でも、そこにはとんでもないモンスターとそれを探し求めて自分の物にしちゃった博士がいるって…。」
フレキ「でもそれ、単なる噂でしょ…ガセだと思うけれど。」
サタン「それでいい、噂でもいいのだ…とりあえず知っていることを話してくれるだけでも十分だ！」
フレキ「そう…でもなんでそんなに必要なの、あんたが欲しいわけでもないんでしょ？」
サタン「まぁそうなんだが…魔王様は私の産みの親でもあるし、その不死身の薬…い

や不死身の泉とやらが気になるのだ。」
フレキ「本当にあるかどうかを？」
サタン「ああ、だから旅をしている。」
と一つ目の質問が終わった。不死身の薬は、不死身の泉に行けばあるということがわかった。しかし、本当にそれがあるかは半信半疑だった。それにサタンは不死身で年を取らないとはいえ、その不死身の泉は一体どうなっているのかそれを確かめたい一心だったのだ。魔王が死ねばサタンは国としての王となれるが、産みの親でもある者をみすみす死なせるわけにはいかないと心に決めていたのだ。
サタン「二つ目の質問いいか？」
フレキ「もちろん。」
サタン「奴隷法についてなんだが、無差別に奴隷を買えば暴力などをし殺しているという件を聞き調査しにきた。」
サタン「奴隷に危害は加えてはいないか？」
フレキ「うちは奴隷はいるけれど、みな忠実な使用人よ。」
ゲリ「暴力なんてとんでもないよね…僕達は奴隷にしてる人たちには優しくしてるし、奴隷じゃなくてみんなメイドとか呼んでるよね。」
フレキ「ええ、私の家族も使用人は大事にしていたし…一時期私達は奴隷として捕ら

えられそうになったことがあったの。」
ゲリ「奴隷になったとき、奴隷になってる人たちの気持ちがわかったよ…だから可哀想な奴隷達を買っては僕たちは優しく扱ってるんだ。」
サタン「それは驚いた、私は正義の方を貫く魔王でね…普通の魔王ならその環境を壊そうとする。」
マルコ「それっておとぎ話の時だけですよ…。」
サタン（え、そうなの!?）
マルコ（そうですよ、悪魔族の人たちは下界では悪戯好きの悪党だって思われがちですが…ほとんどの悪魔族の人たちは全然優しいって評判ですよ?）
マルコ（現に、魔王であるあなたが国のために仕える優しい勇者だって噂になってる程度でしたし…。）
サタン（よく知ってるな…そんなこと。）
マルコ（町で評判になってたものでつい耳を傾けてしましました。）
サタン「まぁ…とにかくだ、優しい善人でよかった…王になると強欲になりやすいからな。」
フレキ「みんながみんなそういうわけじゃないのよ?」
ゲリ「うんうん、最近では優しい人増えてきてるからね。」

サタン「そうか…よし、聞きたいことは聞いた、協力に感謝する！」
といい、城を抜け自分達がいた宿に戻ろうとした瞬間緑色の狼にぶつかってしまった。二人が謝るとサタンはまっすぐ進み始めた。しかし、ある緑色の狼女は立ち止まり後ろを振り返った。そしてサタンの名前を呼びこう言い出した。
???「ま、待ってください！」
サタン「どうした？」
???「わ…。」
サタン「わ？」
???「私を仲間にしてください、私立派な獣人なりたいんです！。」
サタン「え、えええええ!?」
突然剣士になりたいと言い出した謎の狼女、その子は一体誰なのか。そしてサタン達は無事に不死身の泉を見つけ出すことが出来るのだろうか。